

# 原爆の悲劇継ぐ 1人芝居

## 置戸出身 俳優・佐々木さん

### 「父と暮せば」上演170回超



「僕の劇が戦争の悲惨さを少しでも考える手だてになれば」と話す佐々木梅治さん

オホーツク管内置戸町出身で「劇団民芸（川崎市）の俳優佐々木梅治さん（69）が、広島原爆で被爆した父と、その娘を描いた演劇「父と暮せば」を一人芝居で演じている。2003年から北海道や四国など全国を巡り、上演回数は170回を超えた。戦争の記憶が風化する中、原爆の悲劇と生きる喜びを伝え続けている。（東京報道 山本倫子）

佐々木さんは北見北斗高から立命館大を卒業。俳優になった。近年は声優としても活躍、韓国ドラマ「チヤングムの誓い」のトックおじさん役で知られる。「父と暮せば」は作家の故・井上ひさしさんの作品で、戦後3年たった広島が舞台。原爆で父を失った娘が生き残ったことに負い目を感じて苦しんでいたところ、父が幽霊になって現れ、娘を励ます物語だ。井上さんが旗揚げした劇団「こまつ座」が1994年に初演し、国後島出身の俳優、故・すまけいさんが

主演を務めた。東京で舞台を見た佐々木さんは「笑って泣いて、希望が見える。年を取ったらこんなすてきな作品ができる役者に」と思った。

ある時、自宅で台本を読んだところ妻が感動し、泣いた。一人芝居ができるかもしれない、とひらめいた。03年に都内で初めて上演し、役作りで広島も訪れた。道内は置戸や北見などで披露し、今年も東京、新潟、大阪で演じる。

08年からは広島への修学旅行を控えた東京の私立中学3年生を前に上演を続ける。ある年には「悲惨さから目をそらす見えてきてほしい」と訴えた。置戸での少年時代に故・新藤兼人監督の映画「原爆の子」などを見て恐ろしかった記憶が、戦争について深く考えることにつながったからだ。

生徒からは「こんな手紙が届いた。『平和記念資料館で見た』おぞましい光景は心に刺さったままですが、そのことを忘れてはならないと思った」。手紙は初演から使っているポロポロの台本にはさみ、大切にしている。



【千歳】福島第1原発事故後の家族を撮り続けている福岡在住の写真家、亀山ののこさん（37）の写真展「100人の母たち」が4日、千歳市清水町4の千歳栄光教会で始まった。亀山さんは、事故後に福島県外に避難した家族らを撮り続け、「原発はいらない」とのメッセージを伝えてきた。日高管内新ひだか町に避難している福島原発告訴団事務局

長地の脇美和さん（44）が同教会から講演を依頼された際、亀山さんを紹介し、写真展の開催が実現した。展示作品は、木漏れ日の中で顔を寄せ合う親子の写真など約20点。日常の風景を通して、穏やかな暮らしを誓う原爆事故の恐ろしさを訴える。地脇さんは写真展最終日の6日午後2時から「福島の今」と題して講演する。写真展も講演も入場無料。

を奪る。オパチー、全身の軟骨組織を記号して。をバスで見て回り、最後ま

を奪る。

オパチー、全身の軟骨組織を記号して。

をバスで見て回り、最後ま